

特集

2011年春の講演会 「希望のつくり方および希望学のエッセンス紹介」

玄 田 有 史 (東京大学)

司会 (植田和弘 京都大学) :

玄田有史先生については、すでに多くの業績を上げ著名な先生ですので、紹介する必要はないと思いますが、労働経済学がご専門で、石川経夫先生の下で勉強を始められたのだらうと思います。

最近希望学を開拓しておられまして、東大出版会から『希望学』4巻が出ております。それから、『希望のつくり方』と題する岩波新書を出版されておられます。希望は、つくるものだという魅力的な内容を持った著作です。subject to well-being と言いますか、そういうことと大変深い関係を持つ内容だったと思い、大変関心を持っているものでございます。

せっかくの機会なのでお話を十分聴いて、また皆さんと活発に討論したいと思います。では、玄田先生お願いします。

ご紹介ありがとうございます。初めまして、こんにちは。玄田と申します。今日は、お招きいただきましてありがとうございます。京大に来るのは年に1、2回ぐらいだと思いますから、久しぶりにこうやって、サクラがまだ残っている、きれいな時期にお邪魔して本当にうれしいです。今日は大学院生の方がほとんどのようですね。

東大でも修士論文や博士論文を読むと「この研究はほかに誰もやっていません」と書いてあることがよくあります。そのとき、だいたい、それはどうしてなんだろうね、って聞きます。

私はいままで、その研究がなかった理由は三つぐらいあると思う。一つは、やはり本当にすごい研究なんだけど、誰も気付かなかった。これは、やはりあると思う。二つ目は、すごい研究のように見えて、本当は全然すごくない、誰もやる価値を見いださなかった。どうでもいいことなので、やる人がいなかった(笑)。

三つ目は、本当はすごい研究なのけども、みんなが明らかになればいいなとは思っているが、何か理由があってできなかった。本当に価値があるものであったら、誰かがやっているはず。それが、なかなかできないというのは何か原因がある。それを克服できればオリジナルな良い研究になるわけです。

私が大学院生だった1990年代の初めぐらいのときには、東大の経済学部にはいろいろなゲーム理論の精鋭の先生がいたり、アメリカでPh.Dを取って帰ってきた人がたくさんいて、みんなが憧れてました。

見ていると、大学院にはブームができます。その中で「自分は」というのは、やはり、すごく孤独なんです。

もともと私が経済学を勉強しようと思って、大学院に迷いながらも入った理由は、迷っていたとき、大学院の入試の1カ月ぐらい前に、本当に受けるかどうかを迷ったときに、亡くなった師匠の石川先生から手紙をもらって、「迷っているんだったら勉強してみたらどうですか」と言われて勉強をすることにしたんです。

私は石川先生に経済学とは何をする学問かと一度だけ聞いたことがあります。経済学というのは、同じように頑張っていて、本来同じように力があり、努力して同じように頑張っている人の間で、一方でとても恵まれる状況にある人と、他方で非常に過酷な状況な人が生まれてしまうのはなぜなのか、そういう状況を解明して、少しでも改善の道を探っていくことが経済学だと言われたことがある。それはジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill) の言葉の引用だと言われました。

ジェームス・トービン (James Tobin) - アメリカのケインジアン代表だった人です - は「経済学がやっていることは、真っ暗闇の中で誰かが財布を落としてしまって、その落とした財布をみんなで探すようなものだ」と言った。ただ真っ暗闇では本当に探せない。たまに電灯がついていて、そこは探す。そこに行って「ああ、落ちていなかった、残念」と。そうすると、ライトがたくさんつけば、そこでは落ちているものを拾い上げることができるかもしれない。大事なものは、みんなでスポットをより多く当てていくことでしょ。

最近、経済学の中で、私が若い頃には、まったく考えられないような動きがある。いま、幸福を考えるという経済学が、すごくはやっています。僕らが大学院生のときには、幸福なんていうのは経済学の対象ではないという感じだった。効用関数をベースにしながら着目するのは、雇用や賃金のように数量的に把握できるもの。幸福なんて曖昧なものは経済学の対象ではないと、時代によって経済学も影響を受けます。

一方、私が今やっているのは「希望」の研究 (= 希望学) です。私は、ちょっとひねくれ者なので、みんながやっていることは、やらない。「幸福」と「希望」って、同じようなものだと思いますか。実はちょっと違います。

幸福は、維持継続を求めるもの。つまり、幸福な人は、たいてい「いまの状態が少しでも長く続けばいいな」と思う。幸福は「長く続けばいいな」と思う。

何年前か前、日本にも検索システムを開発している人がいて、その人に「希望」は、どういう言葉と密接につながっているのかを調べてもらった。とても印象的だった。

検索システムに出てきた言葉は、残念ながら皆さんの答えと違うものだった。そのときに出てきた答えに驚いた。「水俣」という言葉でした。

私は正直驚きました。話を聞いてみると、「水俣」の後に「希望」という言葉が、いろいろなところで節々に使われたらしい。後から聞くと、阪神・淡路大震災にも「希望」という言葉は非常に使われたらしい。「水俣」というのは、もちろん戦後最大の公害病の一つです。悲惨

な状況を変えるために必要なのが、希望なんです。

いま東北の被災地は大変ですが、水俣も大変厳しい過酷な状況を経験した。時には差別や貧困、迫害と、本当に厳しい状況で、希望どころか、むしろ「絶望」という言葉がぴったりのくらいであった。これが希望という言葉と関係があるみたいだ。それはなぜだろうと思う。

幸福が維持継続と密接に関わっているとすれば、希望は変化と係わっている。いまの苦しさから少しでも良くなりたい、いまの苦しさを少しでも和らげたいという心理のときに、人は希望という言葉強く想起する。やはり Hope という言葉は Change という言葉と密接に関わっている。オバマさんが大統領になったときに、彼の Change というフレーズがとても有名になったけれども、彼のもう一つのキーワードが Hope だった。

もともと希望学をやろうとしたきっかけは、私が労働経済学をやったことと、とても関係がある。若年雇用ということを、何年か前から考えていました。1998年ぐらいから失業率が急が上がっていきます。そのとき、フリーターや若年雇用が増えたのだけれども、社会の目はそういう若者たちに厳しかった。それは若者の甘えだという声がすごく強かった。

その一つは、経済現象を、人の意識とか、能力とか、そういうものを最終的な原因にはいけない、ということでした。若者が働く意欲が弱まったからだとか、若者がやる気がなくなったから社会がこうなってしまったんだという結論は、経済学はあまり歓迎しない。人の意識や能力とか、結局、彼らは力がないからこうなった、それは仕方がないというような結論は、経済学としてはあまり望ましくない。

もちろん、やる気のない人は世の中にたくさんいるし、力がない人もたくさんいるけど、それを最終的な原因とするのでは経済学は身もふたもない。やはり、経済学が最終的に考えることはシステムの問題なんです。

仮に、それが意識や能力の問題に見えたとしても、今度は最終的に、それを生み出しているシステムは何かが問われなければならない。若年雇用の問題でも「意欲が弱いんだ、能力がないんだ」ではなく、そうなってしまっているシステムの原因は、どこにあるのだろうと、考えるべきなんです。

ニートの問題も、希望の問題と、すごく関係があります。最初、ニートのことを言い出したとき、世の中にそんなに働くことを諦めている、だらしない若者が多いのか、と言われました。

しかし、ニートや引きこもりの子は、意外と本当は潜在的には意欲がすごく強いところがある。引きこもりは、本当に考え過ぎなところもある。引きこもりの子に、あるとき会って何をやってたのと聞くと、「ずっと意味を考えていた」と言う。生きる意味、自分の意味、働く意味、人間の意味、社会の意味とか。そういうものを考え続けたら本当に苦しくなって、出ていくのが怖くなった。ニートに足りないのは、意欲や能力じゃないんです。

ニートには何が足りないかという、希望がないと思った。そのときに、希望がないってどういうことなんだろうなと思って、そこから希望学を始めるわけです。

以前、ある人から、「希望学の落としどころはどこですか」と言われて、いや特に考えてい

ないですけど言ったら、「ええ！」というような顔をされた。今は、やはり世界の東大とか世界の京大と言われ、一つでも多くの研究業績を上げて、引用されるような学術雑誌に投稿するように言われる。それも、私はすごく健全でいいことだと思う。

でもそれだけでは、つまらないとも思った。投稿には「落としどころ」がある。あのジャーナルに掲載されるんだ、というはっきりゴールは見えている。そのために、いろいろな作戦を考える。

もちろん、それは大事だし、やらなきゃいけないけれど、それだけでいいのかなとも思ったんです。いま本当に必要とされている問題を考えたときに、多くに希望がないとか、希望が持てる人と持てない人の格差があると言われ、なぜこんなことになったんだろうと素朴に思った。だったら、考えるしかないでしょうという感じで、希望学は始めたんです。

非常に見通しもない、落としどころもないけど、いま、みんなが必要としている問題を考える。できるか、解決するかどうか分からないけど、必要とされるのであれば、考えようとしなければいけない。そんな経済学も大事のように思います。

公共経済の分野でも、広い意味で公共政策と、いろいろなタイプの研究があると思いますが、やはり1年ぐらいの間は、本当に机の上にしがみついてずっと研究するのが大事だと思います。自分の好きな論文を1個か2個決めて、本文はもちろんのこと、図表の書き方や、脚注の読み方、引用文だとか、本当に真っ黒になるぐらい、もう裏表全部、何が書いてあるかを覚えちゃうぐらい、何か一つの論文や本にほれ込んで、それをもう真っ黒になるぐらい読む。それは1年目のときにはすごく大事な経験で、たぶん、それは一生のお守りになります。学ばは、そもそも「まねる」だから、それを真っ黒になるぐらい見て、自分の型をつくっていくことが大事だと思います。

希望は個人の心の問題だけではありません。希望は社会の問題です。何か希望を持っている人と持っていない人はどこが違うかはいろいろあるが、一つはやはり仕事が大きい。日本人に「あなたの希望は何ですか」と聞くと、かなり高い確率で仕事にまつわることを言います。もっと自分らしく仕事をしたいとか、とにかく仕事に就きたいとか、仕事に絡めて希望を語ることが圧倒的に多い。アジアの研究者に聞いたら、「ここまで仕事に希望を結びつけるのは、日本特有だろう」と言われたことがあります。だから、仕事に就けている人と就けていない人とは、すごく希望に影響がある。

年齢も関係があります。一般論で言えば若者の方が希望は持ちやすい。それはなぜかという、若者が持っている極めて重要な財がある。それは時間です。時間という財は、希望にはものすごく重要なインプットになる。ただ、もちろん高齢者に希望がないということではないですが。

経済学で気を付けなければいけないのは、経済学は概して、一般的に、こういう傾向があるということしか言えないということです。断定はほとんどいえない。英語で言うところのmayやcanなんです。「こうであるに違いない」というのは、ほとんど言えない。最近「一度

フリーターになるともう抜け出せない」というような言い方をする人がいますが、それは間違っている。フリーターになると抜け出すのは「難しい」ぐらいは正しいけど、「抜け出せない」というようなことはないんです。事実、非正規社員から正社員に転職した人が何人ぐらいいるかということと平均年間40万人ぐらいいるわけです。けっしてわずかではない。

最近よくないのは経済学の人ですら、不用意に断定をすることです。経済学者は、歯切れが悪くて当たり前です。そういう歯切れの良さで勝負をするのは、学者の仕事ではない。「そういう可能性がある」ということが大事。そこは気を付けないといけない。

希望には、教育機会もすごく大きい。日本は学歴社会ではないといわれることもあるが、学歴にコンプレックスを持っている人は世の中にはたくさんいる。勉強したくてもできなかった人は世の中たくさんいる。教育機会に恵まれて知識やいろいろな経験を身に付けて、自分の可能性を広げた人は希望を持ちやすい。もちろん収入も大きい。収入がない人とある人を比べたら、収入がある人の方が自分のやりたいことをかなえやすい。健康も大きい。やはり健康に恵まれている人の方が希望を持ちやすい。

もう一度、繰り返して言いますが、統計や経済に言えることは傾向でしかない。学歴が低くて、健康でなくて、年齢が高くて、収入がないと希望を持ってないのかということ、そんなことはない。一般論でしか言えないことを断定的に言うとは、本来やろうとしている目的とは違う方向に、経済学がいつてしまう。

それから自分が孤独だと思っている人は希望を持ちにくい、希望がないと答える傾向が非常に強い。

社会学の概念で **weak ties** というのがある。weak は弱いという意味で、ties はつながり。これはマーク・グラノヴェッター (Mark Granovetter) という人が発見した概念です。アメリカは転職社会だというけど、転職社会だから、みんなが転職してハッピーになっているかというと、必ずしもそうではない。グラノヴェッターさんが、転職でハッピーになるのは、どういう人かと調べてみると、一番大きいのは資格や学歴ではなくて、いったい誰に転職を相談したかということだった。たまにしか会わないぐらいの人間関係だけど、信頼につながっている人との何気ない会話の中で、はっとヒントを見つけて転職をした人は、すごくハッピーになることが多いという。

自分一人で考えたり、自分がいつも日常、一緒にいる人というのは、だいたい情報が限られている。転職は、やはり未知の世界への挑戦だから、自分の持っている情報だけでは判断できないことがたくさんある。そのときに自分のワールドとは違うインフォメーションセットを持っている人とつながっていて、その人の話を聞いて、イマジネーションすると、ああ、こういう世界なのか、これは自分にもいけるかもと思う。weak ties はインフォメーションセットを広げる、自分の持っている情報のノイズを下げる。そうすることで、可能性やヒントが出てくるんです。

昔は、そういうのはアメリカだけで、日本には関係ない、日本は weak ties ではなくて大事

なのは、strong ties だと言われていた。strong ties とは、要はコネです。地縁血縁という、そういう強い人間関係が重要だと言われてきた。しかし日本もだんだん変わってきた。もう、そんなコネで雇えるほど日本の会社も余裕がない。どちらかというとなんか緩やかな人間関係でつながっている人の方が、日本でも転職に成功する可能性が大きい。

日本のここ何年間かの最大の問題は、独立開業をする人が全然増えない。Facebook だ、マイクロソフトだと、アメリカなどはいろいろなことをやるし、中国だって出てきたけど、日本は全然、自分で自分のボスになる、be my own boss という人が出てこない。なぜか。経産省が非常に苦心してベンチャービジネスのエンジェル税制や助成金などをやってもうまくいかなかった。たぶんそれは、weak ties が転職だけではなくて、開業にもとても大事なことと関係している。

あるとき、ベンチャーを支援するインキュベーターに、どういうアドバイスがベンチャーをやるには有効ですかと聞いたら、「いろいろあるんですけどね」と言われて、一つは「小学校の同窓会は大事にした方がいいですよ」と言われた。小学校の同窓会は行ってみると、いろいろな人がいる。地元で公務員になっている人、学校の先生、農業をしている人、弁護士、等々いろいろな人がいる。だけど同じ小学校の出身だから、年齢が違っても同じ校歌を歌える。そうすると信頼関係がある。いろいろ素直に聞けたり、教えてもらったりできる。

こういうのをまさに weak ties と言う。そういうものを日ごろから大事にするような習慣を持っている人はやっていける。だから weak ties は大事。日本は、かつてであれば、とにかく組織のメンバーになることが、あらゆることの前提条件で、メンバーにならないと何も始まらない。しかし今は、だんだん変わってきて、社会が組織ベースからプロジェクトベースに変わってきた。昔は組織から始まったけど、今はプロジェクトから始まる。

まず、こういうプロジェクトを実現させたいというのが出てきて、クライアントから「このプロジェクト、欲しいね」と。プロジェクトリーダーが決まると、プロジェクトリーダーは、どうしようか考える。自分一人じゃ絶対できないと思う。そういうときに、これはあの人に頼もうとか、彼に彼女に今度こういうプロジェクトがあって、ちょっと助けてよというようなときに、スケジュールを見て「大丈夫だよ、分かった」と言って、ばあっと集まる。プロジェクトは期限が決まっているから、期間が終わると「お疲れ」と言って乾杯して、また何かあったら会おうねって。

社会全体がそういう方向になっているから、もう weak ties がないとなかなか良い仕事ができなくなっている。だけど、社会にはこういう weak ties がなかなか持てない人がいる。それはどういう人かという、それを社会学の観点では「階層」と言う。weak ties を持っている人は、だいたいお金や時間に余裕がある人で、エリートや社交家たちです。と。私は、それはそうかもしれないけど、もっとみんなが weak ties を持てるようなシステムはどういうものだろう。私はまだ分からないけれど、こういうことを解明していくことも、これからの公共経済

の大事な課題だと思う。

ニートのときもそうでしたが、希望学でも、希望の定義とは何ですかと、しばしば質問される。経済学は定義が大好きです。文化人類学は定義が嫌い。定義をすると実態をゆがめて見てしまうから、実態を正確に見られなくなります。経済学は、共通の言語になるためには、定義がないもの、数値で捉えられないものは存在しませんという傾向もある。

ニートのときには、最初はあまり明確に定義をしない作戦でいきました。ニートの本を書いたときに、必ず「ニート」というのは定義が曖昧だと言われると思ったし、実際に言われた。それがあるとき、ニートや引きこもりの支援を何十年もやっている人に「定義しなくていい」と言った。では、どうするんですかと言ったら、「いままで議論されなかった若者みんなだと言え」と言われた。「とにかく何かを定義することで必ずこぼれ落ちてしまう人が出てくるから、いままでフリーターや失業者と扱われなかった人みんなをニートだと言え」と。

希望も、最初はあまり定義しなかった。今は、希望の定義をしています。Hope is a wish for something to come true by action という、これは一応、僕らが希望学の中で考えている定義です。希望には四つの柱がある。wish と something と come true と、そして action。たくさんの中学校や高校で講演したときに実感しました。希望がない、いわゆる生活保護の家庭が多いなど困難校と言われる学校で、「子どもたちに希望が持てるような話をしてください」と。それは、難しい。私は夢を持ちましょう、希望を持ちましょうと言うのは、あまり好きではない。

そのかわりに、どうも希望には四つの柱があるという話をする。希望には、まずなんといっても、気持ち(wish)はまず大事。野球やサッカーで「最後は気持ちの問題なんです、技術の問題ではなくて、気持ちで勝つか負けるかなんです」ということがある。

もう一つは、何に対する気持ちかと言うと、あなたにとっての大切な何か(Something)。希望は未来のことなんだけど、未来ってよく分からない。その中で何がどうなってほしいって、あなたにとっての something は何だろうか。

もう一つは、どうしたら実現する(come true)か。それは、すぐにはならないかもしれないけど、こうやったら実現できるのかなという作戦や道筋です。

最後は、行動(action)だという。どんなにいい作戦を考えても、やはり行動しないとまくいかない。

希望は、気持ちと、あなたにとっての大切な何かを決めることと、それがどうなったら実現できるかを考えることと、あとは何を行動するかという、この四つの柱が見えたら希望ってできるかもしれない。

そういう話をする、反応が結構ある。自分は、やっぱり action がなかったというようなことを言ったりする。自分は、本当は歌手になりたいと思ったんだけど、歌手になるためには落ちてもオーディションを受けなければダメなんですよ、でも自分はいま、やっていない、とか言ったりする。

最終的には、僕らがやろうとしている経済学や公共経済、財政学、環境学は、やはり社会を

本当に愚直に、どうなれば、もっとよくなるかを考える学問だから、最終的には社会に還元していきたい。いま、しんどいなと思っている人たちに何かそういう考えを、自分で考えるヒントが提案できればいいないつも思う。難しいけど。

希望の話をするときにとても印象的だったのが、希望に対する「物語」という言葉を使うことがとても多いということ。「希望というものは自分の人生の物語の中の・・・」という話をする。

希望を持っている人は、実は過去に結構厳しい挫折をしている人が意外に多い。挫折を乗り越えた経験を語れる人は希望を持っている人が多い。就職して3年以内に、その会社でとても大きな失敗や挫折をしたことがありますかと聞くと、半分ぐらいの人が「ある」と言う。その半分のうちのだいたい8割ぐらいは、それを何とか乗り越えたと言う。その挫折を経験して乗り越えた人の方が、いま仕事に何か希望を持って進んでいるということが多い。実は自分はそういう挫折を経験したことがないとか、経験していまでも乗り越えられていないという人は、希望を持ってないという人が多い。

あとは、あなたは無駄なことや損なことはあまりしたくないですかと聞いたときに、「絶対そんなことは嫌です」という人は、あまり希望がない人が多い。損得勘定は大事ですが、それがあまりにも強すぎるという人は希望も一緒に削ってしまうところがある。効率や損得とか経済的で好きでしょう。だから希望がない人が多い。希望のようなものに価値をあまり感じられない人が多い。経済学で言うと、昔、ケインズが言ったアニマルスピリットのようなものが、希望の概念に非常に近い。数学的な確率論の表現ができるとは限らないものが大きい。

『夜と霧』という、フランクフルという、アウシュビッツで収容されて生き残った心理学者の有名な本がありますが、いつか連合軍が迎えに来てくれるという希望を強く持っている人ほど、心身に支障を来して死んでいったという記述がある。希望はつくることができる。そのつくり方がとても大事で、先ほどの come true を考えているときに、あまり途方もないことを考えていると、途中で希望が消えていったりする。

効率って経済学では、とても大事な考え方です。でも一方で、あまりにも損得の観念が強すぎると、希望とかアニマルスピリットが萎えてしまって、社会発展の原動力を失ってしまうかもしれない。だとすれば、どこにうまい融合点があるのか考えることは、とても大事なことになる。

そういうことは、希望学でも全然分かっていないし、経済学でもまだまだこれからだし、そういうのは新しい研究者たちがフロンティアを開拓していったらいいと思う。

希望学の中で幾つか好きなエピソードがある。一つは、ある会社に昔行った時の話。女性が活躍できる会社として有名な会社。あるとき、最近はどうですかと言うと「いい人が辞めちゃう」と言う。会社が期待していた人が辞めてしまうことがすごく多くて、困っていると言う。そこで、辞めて離職した人にインタビューをしたら、会社を辞める理由は二つしかない、その会社の人事の人は気付いた。

一つは、仕事が、すごく忙しい。優秀でもやればやるほどどんどん仕事が出てくる。やってもやっても終わらない感じになって、あるとき、先がまったく見えない、もう続けられないと思って辞める人たちが、半分ぐらいいた。残りの半分は、やはり優秀だから、苦しい中でも自分は何とかやり遂げて、毎日毎日一生懸命やっているうちに、ある日突然、どんなにやっても結局こういうことかと先が見えちゃった感覚になって、ああ、もう続けられないと思って辞める。

結局、辞める理由は、先がまったく見えないから辞めるか、先が見えちゃったと思って辞めるという正反対の理由。正反対だけど共通するのは、両方とも希望がないということ。先が見えないのも不安だけど、もう見えたと思っているのも、やはり希望を持てない。じゃあ、どうすれば希望を持てるか。アンビバレンスという、どっちつかずで、何か中途半端で決定力がない感じだけれど、どうも違うかもしれない。見えるのと見えないのとは、うまく共有できている状況が一番、本当は想像力の源泉のようなところがある。

もう一つ、私が好きなエピソードはレコード会社の人から聞いたある有名な若い女性の歌手の話。あるときその歌手は「絶望の反対って何だと思う」と聞いた。レコード会社の担当者は「やっぱり希望じゃないでしょうか」と言った。そうしたら、「そうかな？」って言った。それで担当者が「じゃあ、何だと思う？」と聞き直したときの答えが好きなんです。彼女は「絶望の反対はユーモアだと思う」と言った。

私はこの話がとても好きです。『新明解国語辞典』によると、ユーモアとは「社会生活（人間関係）における、不要な緊迫を和らげるのに役に立つ婉曲表現によるおかしみ」と書いてあった。

私も、希望には、ある種のユーモアのようなものが必要に思う。今は、社会生活、人間関係における不要な緊迫を和らげるどころか、不要な緊迫を高める話題がばかり。経済学者の仕事には、事実を踏まえて、ある種の緊張感を社会に与えることにあると思う。みんなが現実を見つめるための、いろいろな材料を提供したり、見方を提供するということは、すごく大事なことでだろう。一方で、それが不要な緊迫を高めることばかりになってもいけない。

私はすぐに政策に役に立つ学問をする必要はないと思っている。むしろ、みんなが適度な緊張感を持って、自分の現実を見詰めたり、本当に苦しい状況にある人たちにイマジネーションを働かせることができるようなことでできれば、それはすぐに政策などに役に立たなくても素晴らしい研究だと思う。

政策提言能力や問題解決能力を私は全然、学生に求めたことがない。大事なのは、問題を解決する能力ではなく、発見する能力。私の感覚だと、問題を発見したとき、すでに問題は7割か、8割がた、解決しているような感覚がある。発見されたことで、みんなで問題を共有できるために、試行錯誤はあるけれど、いい方向に進められる。

本当に難しい問題は、まだ発見もされていないから解決のしようもない。こちらの方が大変だと思う。ニートだって2004年に急に生まれたわけではなくて、ずっといたんだけど、言葉

がなかったから、概念がなかったら、存在すら認識されてこなかったんです。概念化されて初めて、それですぐに解決しなくても、みんなで考えていくことができる。だから、解決を焦ってはダメで、むしろ発見しなければいけない課題はたくさんあると思う。

大学院の生活をするとき、修士の中でこれは自分の一生のテーマというのとはなかなか見つかりにくい。すぐには見つからないし、もちろん修士を出て社会に出て行く人もいると思うから、一生のことを考えて研究をしているのではないと言う人もいるかもしれない。けれど、どういう立場になっても、やはり研究を続けるということが大事な気がする。

学ぶということを自分の人生の中でいま選択したわけだから、これを、すぐに答えが出なくても、まずは一生、自分の研究になるようなものを見つけていきたいと思って、まずはこの論文と本当に寝食を共にするんだ、というぐらいの自分の一生のものを見つけて、研究に取り組めばいいんじゃないかなと思う。そこに本当に価値のある研究が生まれてくるのではないかなと思っています。

ご清聴いただき、ありがとうございました。

特集

2011年春の講演会 「質疑応答」

玄田 有史（東京大学）

司会：

本当にとてもよいお話をいただいたと思います。希望学の話もしていただいたのですが、経済学の話もたくさん入っていて、それから、大学院生活の話も入っていました。せっかくの機会だから、質問、コメントよろしくをお願いします。ここは遠慮なくお願いします。はい、どうぞ。

籠橋一輝（京都大学）：

ありがとうございました。いま私は博士課程6年目なのですがずっと前に進めずに悩んでいる時期が続いていました。最近になって、あまり考え過ぎずに博士論文をとにかく書こうと決心してからは、気持ちも少し楽になりましたが、やっぱり自分の悩みや迷いはいつまでも取れないというのが正直なところです。

お聞きしたいのは、自分が押しつぶされてしまいそうに感じたときに、玄田先生は例えば大学院時代に、どう自分をマネジメントされていたのか、あるいは気持ちをコントロールするように心掛けていたのか、その点に関してお話をお聞かせいただけると、うれしいです。

玄田：

大学院生時代には正直言って、あまり考えたことがなかった。それに、たぶんみんなと状況が違ったと思う。僕らは本当に恵まれた時代だった。私は大学院を4年間しかやっていない。4年目で就職の話が来て、それで就職した。1992年だから、第2次ベビーブームの影響で学部増設の一番ピークの時期だったので、基本的に就職口があった。いまでは考えられない。

だから、そういう悩みは、もちろんあったんだけど、たぶん、そこまで深刻に考えないうちに就職できたから、むしろ、「玄田君、それでいいんですか、いましか勉強できないんですよ」と言われたことがあった。ただ、その後を考えていくと、プレッシャーもやはり就職したときからあった。

一番、押しつぶされそうになったときは1998年の6月以降です。師匠が51歳で急死した。私はアメリカに送ってもらって帰ってきて、いろいろ自分なりに考えがあって、恩返ししなきゃなと思った矢先に亡くなってしまった。石川経夫がやり残した仕事が残っているわけでしょう。私は非常に仲が良かったものだから、最後、問い合わせが私のところに来た。私はそのと

きに、私がやります、全部やりますって全部、引き受けてしまった。

もちろん、できるわけない。そのとき、私はテンションが高かったんだと思う。それで、できもしないことをやっていることを、誰かがやはり見ていてくれて、いま考えると、いろいろな人が助けてくれていた。だから、私が自分で何かをして、押しつぶされそうになったときに自分の力で乗り越えたということが、たぶん、あまりない。

ただ、そういう経験を踏まえて、いまでも自分でいつも思っているのは、壁にぶつかったときにどうするかということで、自分に決めていることが一つだけある。それは何かということ、壁にぶつかったときには、壁は無理して乗り越えようとは思わないこと。大事なのは、壁の前でちゃんとウロウロしている、これが大事。それはいつも思う。壁は自分の力で、そんなに簡単に乗り越えられない。だけど、ウロウロしてみる。どこまでウロウロできるか。そうすると、ある日、突然、壁に穴が見つかって向こうに行けてしまったとか、ウロウロしている間に壁が勝手に崩れるとか、ウロウロしているのを見つけて誰かがヘリコプターで救いに来てくれたり。壁にぶつかったら壁の前で、ウロウロしているようにしようと思っている。研究も、そんなものかもしれない。

ある理論経済学の人が言ったのは、自分は論文を書くのに少なくとも3年かかる、どんなに短くても3年かかる。1本の短い論文だけど、考えてみると、3年かかっているうちに本当に大事なアイデアが思いついたのはたったの5分だと。たったの5分間のものをかたちにするまで、最低でも3年はかかるんですと彼は言っていた。

ある段階から自由に、ひょいひょいできる人は、もちろんいるけど、それは、よっぽど特別な才能か特別な何かを持っている人で、そういうのに比べて自分はダメだと思ったらやられない。自分はどこまで、ウロウロできるか。ウロウロしている自分が面白いと自分に対するユーモアを持つ。もちろん、それは、ともしんどいんだけど。

よく、数学者は20代が勝負のような言い方をする。数学者の目標、20代ぐらいで思いつく論文で代表作は20代ぐらいのとき。歴史学者は反対で、死ぬ間際、60代か、70代ぐらいで自分の1冊の本を書いて世を去っていく。経済学者はどうなんだろう。よく分からないけど中間ぐらいじゃないかな、たぶん。人によってそれぞれだと思うけど、数学者のようなことはないと思う。ちなみに、私が博士号を取ったのは38歳。生まれて初めて単著を書いたのは37歳。河合隼雄さんでも、最初にご自身の本を出されたのは38歳ぐらいのはずです。焦ることはない。

司会：

ありがとうございました。はい、いかがでしょうか。どうぞ。

会場：

ありがとうございました。先ほどは復興構想会議の話が出てきましたが、そのプレッシャーは、どんなプレッシャーですか。あるいは、1995年の阪神・淡路大震災の際も学者さんがたく

さん入っていましたが、今回の大地震の場合は、研究者が本当に役に立つ場面はありますか。

玄田：

私は、友人も含めて被災地のことを多少知っている。彼らがこれから立ち直っていくためには、いったん、いま住んでいる町を少し退いて移って、別の町でやり直すことが大事なのではないかという気持ちがある。一方で、彼らはそんなに経済的には恵まれていないけれど、自分の家、先祖、ふるさとを守るためにそのまちにずっといる人で、あんな悲惨な状況になっても、まだ移り住みたくない、ここにいたいという気持ちを持っている。それもよく分かる。その中で、何が大事かということ、どういうかたちで示していけるのかということ、は簡単ではない。僕らは国の方針を提案していかなければいけない。だけど、地元のことは地元が決めた方がいい。国の押しつけになってはいけない。そこをどうやってうまく調整をするかというプレッシャーはあります。

そのほか、私はずっと労働問題をやっていて、労働だって生きる、死ぬは関わってはいるのだけど、ここまで直接的に生きる、死ぬという問題に関わることは、いままでなかった。私は阪神・淡路大震災のときは実はアメリカにいて、本当はよく知らないんです。

大事な問題が目の前にあるとき、学者が、何ができるのかと言われたら、本当は何もできないんです。そのことは自覚しないとイケないとも思っている。

僕らは検討部会という部会なものだから、当然、専門的な知識を求められてはいるのだけど、一方で、やはり国が一方的に決めるのではなくて、被災地の地域の意見をうまくつなぎ合わせる場にならないといけない。いま、省庁官庁は「国の」構想会議に、やや距離を置いて見ている。そういう国のいろいろな官庁とうまくつなぎ合わせる場にならないといけないのではないか。必ずしも自分たちの意見を主張する場ではないと思っている。

だから、いろいろな調整の役割を担わないといけない。

研究者は何もできないんだけど、そういう意味で研究者だからこそ、中立ということではないが、いろいろなつなぎ役になって連携して、みんなでつくり上げる国のビジョンというものに協力しないとイケない。うまくいくと、日本はこれから良くなる国になる、そのターニングポイントになるかもしれな。そう考えると、そこに選挙で選ばれたわけでもない自分のような人間が、責任のある立場に就いていいのだろうかというプレッシャーはある。研究者は常に孤独です。頼りになるのは自分の知識や自分の経験だけだけれども、一方で、それだけではいけないという感じもするので、その狭間にすごくプレッシャーを感じている。

だから何度も言うけど、若い研究者の人たちは、すぐ政治力を持とうなんていう大それたことを考えない方がいいと思う。やはり、理論と実証、事実の発見、これが結果的に最も貢献することになると思う。本当に役に立ちたい、世の中を変えたいと思ったら、いい政治家になってもらうか、どんなに嫌われても官僚になってもらうかしない。

佐藤寛也（京都大学）：

興味深いお話をありがとうございました。私は大学院の博士課程の2年にいます。聴いていて、weak ties の話にすごく興味を持ちました。

いま、研究のフィールドとして長野県飯田市というところに入っています。そこで、実際にいろいろと活動をしている方とかと話をしていると、地域では、まだまだ strong ties が機能し、それを基に物事が動いているということを、すごく強く感じます。しかし一方で、そのような中でも、追加で weak ties を持つことの意味はあるのではないかと思うのですが、strong ties で十分に機能している人間関係の中に、weak ties を上手く組み入れるような方法はあるのだろうかという点で悩んでいます。何か良いアイデアはありませんでしょうか。

玄田：

アイデアはありません。strong ties で、地域で生まれ育った人が一回外に出て行って、外でいろいろな経験をして今度、戻ってくると、その人たちにすごく受け入れられやすい。

いま、被災地にも NPO が入っていますが、最初は人々の中でボランティアに対して抵抗感があった。それには幾つか理由がある。一つは、まず自分たちのことは自分たちでやるんだという強い意識を持っている人が高齢者に多いのと、いろいろな人が入ってくことで盗難を警戒する気持ちもあって、外部に対してはすごく慎重だった。結局それをどうしようかとなったときに、その NPO が、被災地出身のメンバーを現地の担当者、つなぎ役にした。やはり、つなぎ役って大事なんです。strong ties と weak ties の両方の接点になる、つなぎの人がいることによって、だんだん輪が広がっていく。

最近の地域再生のキーワードは「よそ者、若者、ばか者」だと言われている。ある部分正しいけど、ある部分は違うと思う。やはり地域を再生する切り札は、そこに住む「うち者」で、ほとんど高齢者だから若者ではない人。そして、ばかではない、普通の常識を持っている人たち。そんな人たちが中心、本当に責任を持ってやる。それが大事。

よそから来る人が、その地域に対して、あまりいいことをしようなんて思わないこと。そんなことはおこがましいと私は思う。だいたい、いいことをしようなんていう気持ちは、長持ちしない。「何でこんなにいいことをしようとしているのに、君たちは分かってくれないんだ、やっぱり strong ties は内輪もめばかりで、ダメだ」となりやすい。いいことしたいという気持ちは持った方がいいけど、あまり、それを全面に押し出してやらなくてもいいと思う。それは心の大事な引き出しの奥にしまっておけばいい。

外からどう関わっていくのか。相性が大きい気がする。私は釜石とは、たまたまとても相性が良かった。だから、どのまちにいても私が受け止めてもらえるかという、きっと、そうでもないと思う。それと、やはり何度も行くということじゃないか。自分たちのことは自分たちでやるからというのでは限界が来るし、先ほどの NPO のように少し仕掛けをしてくと、だんだん外部の人を受け入れることもできるようになってくるから、そこはお互いが少しずつ

試行錯誤をしながら擦り合わせをしていくということではないか。

だから「これをすればうまくいく」という答えが私にはない。

会場：

お話、ありがとうございました。ユーモアというのに、すごく関心がありました。ユーモアのある社会は良いと思いますが、やはり希望をつくるときにも、ユーモアを持って希望をつくれたら良いと思います。そのときには、wishとかsomethingとかcome trueとかactionというフレーズのところにユーモアがないけど、そういったことができるのかということをお伺いしたいです。

玄田：

どうやったらユーモアってできるのでしょうか。ユーモアって何か微妙です。面白いことを言ったりすることが、必ずしもユーモアではない。ユーモアはペーソスでもあるから、少し悲しみの中で、自分で自分を笑ってみたり、そこで受け止めたり許してくれることもある。だから、ユーモアのある社会はいい社会だけど、もしかしたら、ちょっと悲しい社会かもしれない。だからこそ、それが成熟している社会かもしれない。

世界で自分たちが、一番ユーモアがあると思っているのはイギリス人でしょう。でもイギリスが一番いい国かどうかはよくわからない。ただ、ユーモアが絶望の反対にあるといいなと思う。実際、地域再生となるとときに本当に大事だと思う。いままでそういうものが経済学の立場からは苦手だった。どうそれをうまく組み込んで、再建のイメージを持つかということが大事なんだけど、そこは僕らも学んでいかなければいけない。

私は若い人には、これからアーティストになれと言う。広い意味でのアーティスト。ニート、引きこもりの子たちの問題は、「履歴書の空白」という問題がある。面接のとき履歴書を出すと、20代に何年間か何もない、それを「履歴書の空白」と言う。それで面接になったとき、「あなた、これは何もしていないのか」とか「何をしていたんだ」と言われると、引きこもりをしていたのだから書けなかった。それでパニックになって、もう面接は受けなくなる。何もしていないのだから、書きようがない。

私はある時期から、最近、「アーティスト活動をしていて書いておけ」と言うことにしてる。引きこもりながら、どういう作品を自分の人生でつくるのかとずっと考えていたと。それが何かということでしょう。「アーティスト活動に、いそしんでおりました」と書けと。私は本気でそう思っている。

アーティスト活動は制約がない。今度、展覧会の手伝いをしてくれ、立っているだけでいいからと言うと、本当にずっと立っていたりする。その子はだんだん社会復帰していく。やはりアーティスト的なもの、ある意味でアートって大事な気がする。アーティストで餓死したって、あまり聞かない。それをやるための最低限の知識や生きる知恵などが必要な気がする。そうい

うものも含めて、何かいま、社会全体が緊急時のこともそうだけど、広い意味でアーティストのような生き方を前提とした方が、employeeを前提とするよりはラクに生きられるのではないかなと思う。あまり最初から自分のラインはこれじゃないといけないと決めつけなくていいのではないかな。

会場：

お話、ありがとうございます。先生の絶望の反対は何ですか。

玄田：

いま、ぱっと思いついたのは「日常」、普通の生活という感じ。何が普通って分からないけど、寝て起きて、帰る家があってということが本当に、月並みだけど尊いことなのだろうと、いま思う。

経済学もそういうところがある。例えば、日本銀行の役割はいろいろあるけど、一番は物価の安定、通貨価値の安定でしょう。もし、日銀が素晴らしい仕事をして通貨価値が安定して、物価が安定したら、みんなはどう思うかというと、「日銀って素晴らしい」とは誰も言わない。普通だと何も言わない。いわゆるデフレだ、インフレだ、急に円高だとなると「日銀、何をしてるんだ（怒）」となる。

だから、経済の仕事は、究極はみんなに無視されることだと思う。僕らの仕事は究極、日常、誰も何とも思わない生活をみんなができるようにすることが一番大きくて、何かをやって、「すごい、やっぱり経済学はすごい」という機会はあまりない。そういうのは、経済学にはあまりないような気がする。

そう考えると、やはり日常を尊いものだとしてつくっていくというようなときに、今回の震災に限らないけど、そういう意味で僕らの仕事は謙虚でないといけないかもしれない。だから、やはり経済学は地味だといえば地味のような気がする。

絶望の反対は「普通」。震災後に、ますます普通はすごいなって思うようになった。

司会：

では、これで終わりにしたいと思います。玄田先生には、とても素晴らしい、新入院生の歓迎会には本当にぴったりのお話をさせていただけて大変感謝します。ありがとうございました。